熱傷（やけど）

熱傷（やけど）とは、熱によって皮膚や粘膜に生じる障害で、日常にありふれた外傷の一つです。

熱源としては熱湯や油、炊飯器などの水蒸気などが代表的です。このように、高温なものは短時間の接触で熱傷になります。

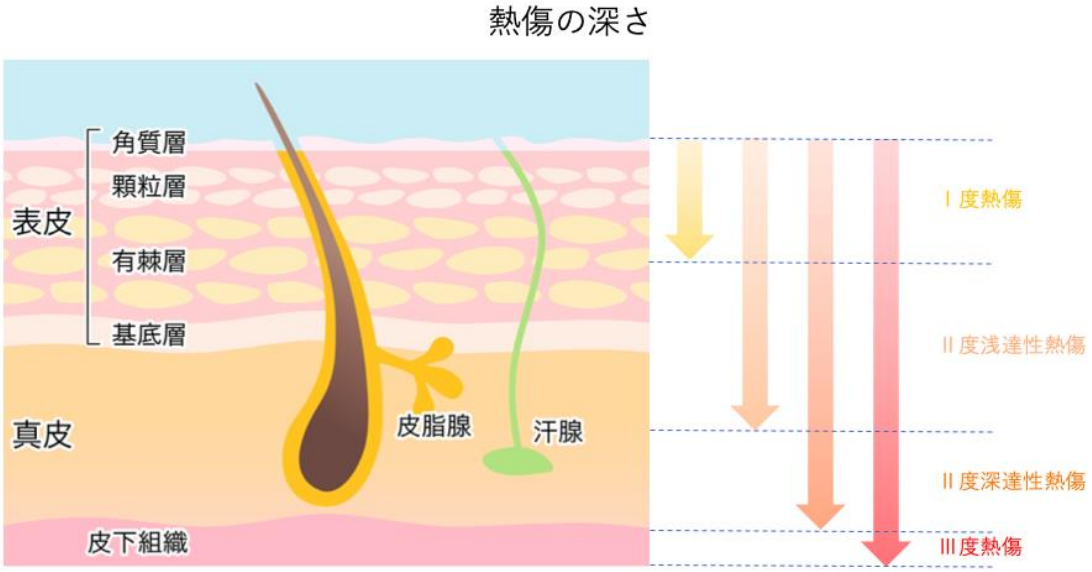
一方、湯たんぽやホットカーペットなど低温なものでも、長時間の接触で熱傷になることもあり、これを低温熱傷と呼びます。

また特殊な熱傷としては電流（落雷や高圧線など）による電撃傷や薬品（酸やアルカリ溶液など）による化学熱傷などがあります。

整容面（傷痕になる）や機能面（ひきつれを起こす）で後遺症が出現する場合があり、特に小児の場合は機能面での障害は発育に影響を及ぼす可能性があります。

これらの障害は初期治療が重要です。やけどをした場合にはできるだけ早く病院受診をおすすめします。当院では、患者さんと相談しながら最適な治療を心がけています。

熱傷の種類



熱傷の分類は下のように、障害のおよぶ深さと面積で分類されます。

● **Ⅰ度：**

表皮内までの熱傷で、赤みや痛みはあるものの数日で治癒します。

● **浅達性Ⅱ度：**

真皮の浅層までの熱傷で、赤みや痛みに加え水疱（水ぶくれ）を伴います。

治癒までには 2～3 週間がかかり色素沈着することもあります。

● **深達性Ⅱ度：**

真皮の深層までの熱傷で、赤みや水疱を伴い、皮膚付属器（体毛、汗腺など）や神経終末を障害するため痛みは強くなります。治癒には 4～5 週間がかかりケロイド（傷の盛り上がり）や瘢痕拘縮（ひきつれ）になる場合があります。

● **Ⅲ度**

皮下組織まで及ぶ熱傷で、皮膚は白色や黒色になり、知覚神経の障害により痛みはほとんどありません。自然治癒は困難であり、手術が必要な場合がほとんどです。

熱傷の治療

● **応急処置**

熱の影響を取り除くためすぐに冷やすことがとても大切です。直ちに水道水で 20 分ほどを目安に冷やしてください。氷を長時間当てると、冷やしすぎによる凍傷を起こす場合もあります。

衣服の上からやけどをした場合は、すぐに脱がずにまず衣服の上から水をかけて冷やした後に衣服を脱がせます。衣服が皮膚に張り付いてしまっている場合は無理にはがさずそのまま病院を受診して下さい。

● **治療方法**

熱傷は徐々に深くなっていくことがあり、まずはこれを予防することが大切です。そのために軟膏やクリーム、被覆材（皮膚を覆う製品）を使用します。

Ⅰ度や浅達性Ⅱ度熱傷では軟膏やクリームによる治療が基本です。

深達性Ⅱ度熱傷やⅢ度熱傷では、非常に狭い範囲であれば壊死した組織を除去し、皮膚が出来るまで時間をかけて待つ方法もありますが、多くは植皮術（皮膚を移植する）が必要になります。

浅達性Ⅱ度熱傷では色素沈着、深達性Ⅱ度熱傷やⅢ度熱傷ではケロイド・肥厚性瘢痕、瘢痕性拘縮（ひきつれ）を起こす可能性があります。

瘢痕に紫外線が当たることを避け、必要に応じてテープや軟膏、クリームで　治療することが効果的です。

瘢痕拘縮が強く日常生活に支障が出る場合は手術による治療を行う場合もあります。

当院では専門外来として熱傷外来を設けております。

特に顔面や首、手、陰部の熱傷や、電撃症、化学熱傷の場合は早めに受診して下さい。